

ミュラー列伝 < >

” 中佐 ”

「ミュラー少佐，いや，中佐だったな・・・」

軽機動部隊指揮官であるヨードル准将はミュラーを自室に招いていた。

ミュラーは士官学校を出て，その後艦隊運用士官として巡洋艦に配属，複数の艦の運用をしていたが，その卓越した運用ぶりは他の運用士官より遙かに抜きんできていた。中尉の時には見聞を広めるためにフェザーンに駐在武官として赴任していたときもあった。ミュラーは大尉に昇進後，軽機動部隊司令部の幕僚として抜擢，そこで戦術作戦幕僚としての実績を蓄積した。数々の戦いでミュラーは少佐に昇進，駆逐艦の艦長として先の戦いで巡洋艦を2隻撃沈するという攻勢手腕に長けた戦術を披露した。そしていま，ミュラーはその武勲から中佐に昇進したのである。

「中佐，どうだね？卿には巡航艦の艦長たる資格もあるし，またこのまま作戦幕僚として残る事もできる。」

ヨードル准将はミュラーの能力を高く評価しており，この若い軍人に期待するところが非常に大きかった。そして，准将は今，自分の幕僚としてこのミュラー中佐を迎えたく，自室で説得にあたっている所であった。しかし，ミュラーの返事はヨードル准将の期待を裏切るものではあった。

「閣下，小官は未だ艦隊運用について未熟なものであります。できますならば，閣下の指揮する機動部隊の艦隊運用戦術士官としていただければ，小官としては幸いと存じます。」

ヨードル准将は意外そうな顔をした。若い佐官達は艦隊の作戦幕僚を栄達への早道と考えており，この帝国軍においてはそれは事実であった。また，艦隊司令としては能力のある佐官を自分の幕僚におくことは非常に大きな意味があった。すなわち，有能な部下は自分の武勲をも手助けしてくれるのである。さらに，平民出身の部下であれば，貴族である司令官につくことによって自分の栄達をさらに加速させる可能性もあった。

しかし，この目の前の若い佐官は，艦隊運用士官を希望していた。艦隊運用士官は派手さはないものの，やはり有能な士官でなければならない。例えば艦隊そのものが混乱に陥ったとき，運用士官の有能の有無によって艦隊の崩壊も決するといっても過言ではない。

帝国軍の軽機動部隊は司令官を准将として，その下に戦艦50隻，巡航艦150隻，駆逐艦200隻が配備されている。司令官自身はその艦隊の運用の指揮をするものの，個々の艦の指揮はそれぞれの艦長が担う。

しかし，司令官の指示や作戦はそれぞれの艦に直接伝わるのではなく，いくつかの艦をまとめたグループ単位で，運用士官が司令官の指示をかみ砕き，それぞれの判断で動かす。そうでないと，各艦は司令など無視してそれぞれに動き始めてしまうからである。

無論，艦隊運用といっても尉官と佐官でその規模も運用内容も異なってくる。佐官は尉官の運用士官を統率し，司令官の指示を伝え，さらに独自の戦術を展開することが可能となる。尉官は佐官の出す指示をさらに各艦へ伝えるが，その戦術を披露する機会は少ない。

ミュラーは前の戦いにおいて艦隊運用系統を有する巡航艦に配属されたものの，その巡航艦が中破し，佐官が戦死した中で的確な指示を各艦に出し機動部隊の1つのグループの崩壊を防いだという実績があった。

今，ミュラーはその艦隊運用に際して，駆逐艦の艦長の経験から非常に重要度が高い任務であることを再認識していた。ここで，艦隊運用士官として経験を積み，自分自身の戦術を確立することは，この先の戦いにおいて，自分自身の大きな経験となると判断したのである。

ヨードルはいくつかの思惑の中から，ミュラーの希望を是とした。つまり，ここでミュラーが幕僚として残るより，艦隊運用の実績を積み，その後自分の幕僚として抜擢することで，ミュラーに対し恩を売れると言う点，そして優秀な艦隊運用士官を幕僚にすることで，自分自身が後に艦隊司令官となったとき，優秀な戦術幕僚を持つことができる等を瞬時に考え決断を下した。

「よろしい，卿の希望を聞き入れよう。早速，軍務省人事部に卿のキャリア・パスについて書類を回しておこう。」

「はっ，小官の希望をお聞き届け下さり感謝いたします。」

「うむ。しかし，卿が実績を積んだ後にはぜひ卿を我が幕僚に迎えたいと思う。卿の能力を運用士官のポストに

おいて発揮して欲しい。」

「はっ！」

ミュラーは敬礼をすると、ヨードル准将の前から去るべく、歩き始めた。

ヨードルはミュラーより10歳以上年上であったが、この若い士官が好きであった。自分の部下として遺憾なくその能力を発揮してくれている。

ヨードルは平民の出身であり、かつ、士官学校を出ていないため、その昇進は遅々としていた。しかし、ヨードルの実績は比類なきものであり、このゲーデルリアン艦隊の中でも特にゲーデルリアン中將に信頼を寄せられている一人であった。

「だが…」

ヨードルはつぶやいた。そして複雑そうな表情を浮かべるのであった。

ミュラー中佐はその後ゲーデルリアン艦隊ヨードル軽機動部隊作戦司令部戦術艦隊運用士官として着任した。しばらくは戦いはないものの、演習やシミュレーションが多く、それと共にミュラーは艦隊運用の難しさを味わい、それを克服しつつあった。そして、ミュラーの指示をだす戦術グループは常に攻勢に長け、守勢に粘り強いという評判が艦隊のなかで大きくなっていった。

”艦隊司令官”

「ほぉ、そのような優秀な士官がいるのか、ぜひ会って見たいものだな」

ハインツ・フォン・グーデリアン中將は旗下の艦隊の中における評判を副官であるシュトラウス大尉から聞いて、興味を覚えた。

「はっ、若い士官ではありますが、攻勢と守勢どちらもバランスよく、その戦術は派手さはないものの、艦隊運用としては完璧であると聞き及んでおります。」

「うむ、大尉、ぜひ卿にはその士官と会えるように手配を進めておいてくれ」

「はっ！」

シュトラウスもこの評判を士官学校の同期から聞いたのであった。ミュラーは士官学校の先輩にあたるものの、砂色の髪をしている珍しい人物であるということしか覚えていなかった。

先日、ミュラーと同じ艦隊運用士官であるシュトラウスの同期と話したとき、ミュラーのの評判を聞いたのであった。その話は艦隊運用士官にしておくのはもったいないという評判であった。

戦いはまず生き残らなければならない。その思いは平民出身のシュトラウスに取っては非常に大切であり、そのためにも戦いに望むにあたり上官や同僚には勝ち残るような者が自分の身の周りに居ることが大切であった。無論、自己中心的な考えで有ることは承知である。

シュトラウスはミュラーの所属する艦隊運用部へ連絡をとり、ミュラーに直接グーデリアン中將の言葉を伝えた。

「はっ、光栄であります。」

ミュラーはそう短く答えると、シュトラウスからの事務的な話、つまりいつ、どこでという事を聞き、記憶にとどめた。しかし、ミュラーはなぜ自分がグーデリアン中將に注目をされるのかが分からなかった。たしかに運用士官として数々の実績は積んでいるものの、たかが軽機動部隊の佐官である。ミュラーは多少とまどいながらも、ヨードル閣下はどう思っているのかということに思いを寄せるのであった。

「キルヒアイス、少将になったから、旗下には約3000隻の艦が配属されるな」

ラインハルトは笑いながら、キルヒアイスの赤い髪を引っ張った。

「そうですね。3000隻ともいえば、その下に准將が6人から7人つきますが、それぞれ艦隊運用に長けた者であるといいですね」

キルヒアイスはラインハルト旗下の艦隊の資料を見つめながら、機動部隊の准將の名前を見た。

「7人の准將のうち、4人が今回昇進した者です。」

「くそ。素人を俺に押しつけやがったな。貴族どもめ..」

「ラインハルト様.. そうではないと思います。たぶん、単純に事務的なものでしょう」

「キルヒアイスがそう言うなら、そう信じることにしよう。だが、どんな実績があるかなど、引き続き調査をしてくれないか？」

ラインハルトはそう言うとう着をとり、席を立った。

「キルヒアイス、そろそろ時間だが、用意はいいのか？」

ラインハルトは新しく少将として任官し、グーデリアン中將に着任の挨拶に赴く時刻となっていた。ラインハルトの分艦隊はグーデリアン中將の指揮下におかれており、一応礼儀として挨拶をしておく必要があったのである。

「そうですね。たしか、アポイントメントは1500でしたから、そろそろ良い時間でしょう」

キルヒアイスは時計をみて、自分も上着を取りに行った。

ラインハルトは自分の能力に対しては自信があるものの、艦隊運用に関しては能力を超えた部分があるため、是非とも優秀な人材が欲しいと思っていた。そう思いつつも、軍務省は機械的に人材を振り分けるだけであり、自分の思うような幕僚の任免を行うには、元帥となり、元帥府を開かなければならなかった。しかし、ラインハルトは未だ少将であり、さしあたり、軍務省との戦いは続けなければならなかったのである。

「ラインハルト様、お待たせしました」

キルヒアイスとはそう言うと、ドアを開け、ラインハルトと共に表に出た。

「ミュラー中佐、卿の艦隊運用に関する手腕はなかなかのものであると、聞き及ぶが...」

グーデリアンは珈琲を手にしながら、ミュラーと対面していた。

「はっ、お耳に汚しかと存じますが、艦隊の戦術運用に関して色々と切磋琢磨している最中であります。」

「そう謙遜するものでもないだろう、中佐。卿は攻勢、守勢のバランスもよく、実際に演習やシミュレーションでは良い結果を得ているではないか。」

「はっ。ありがとうございます。しかしながら、あえて言わせていただければ、実戦での全体的な運用は経験が無く、また実戦時には極度に混乱し、戦術的に使える艦も徐々に減りますので、その部分のバランスを取るのが非常に難しく、こればかりは経験を積まなければと考える次第であります。」

「うむ、卿の心配はよく分かる。実際に実戦を経験しないとわからないことが多いからな。その点卿は尉官の時には運用士官として実戦を経験しているのではないのかね？」

ミュラーはおや、という顔をした。すでに、自分の経歴はこの中將の記憶に入っているのだ。

「はっ。確かに実戦は経験いたしました。前と比べまして、その戦術の適用範囲が広がり、自分の経験していない分野がかなりありますので、その点未だ未熟であります」

「ふむ。卿は謙虚であるな。まあよい。遠からずその手腕を試すときがくるだろう。その時にはしっかりと頼んだぞ。」

「はっ！」

ミュラーは返事をし席を立ち、敬礼をした。

そのとき、シュトラウス大尉がゲーデリアンの部屋に入ってきた。

「閣下、ミューゼル少将がお出でになりました」

「うむ。通してくれ」

ゲーデリアンは短くそういうと、また珈琲を口に運んだ。

ミュラーはミューゼルという名前に興味を覚え、記憶からどのような人物であったかを思いだそうとしていた。

「閣下、小官はこれで..」

ゲーデリアンは敬礼を返した。するとすぐにドアをノックする音が聞こえた。

「ミューゼル少将、参りました」

ミュラーが見たのは金髪を染めた若い将官であった。ミュラーは自分の記憶の中に、皇帝の寵妃の弟が将官になっているという話を思い浮かべた。実際に目の前にすると、非常に綺麗な顔立ちをした青年であった。

ミュラーはラインハルトに敬礼をすると、ラインハルトもミュラーに返礼し、ミュラーはそのままドアに向かって歩き始めた。

ミュラーは部屋を出てようやくほっとした。

「ふう.. 中將に少將.. 中將一人でも緊張するのに.. しかし、あのミューゼル少将は若いな..」

ミュラーはそうつぶやくと、次の戦術会議がいつだかを思いだし、自分のやるべきシミュレーションの課題に思いを寄せた。

” 戦術会議 ”

グーデリアンはラインハルトに向くと言葉を交わした。

「うむ．色々と噂は聞いておるぞ，ミュゼル少将」

ラインハルトはその言い方が気に入らなかったのか，思わず顔をしかめたが，その表情をグーデリアンに見られてしまった．グーデリアンは笑いながら，先を続けた．

「いや，卿には色々な噂があるが，私が興味を覚えるのは，ミュゼル准将，いや少将が今までの戦いで数々の武勲をたてていることだけだ．なにせ，相手は帝国軍を相手にしているのであって，貴族や平民を区別して勝ち負けを決めているわけでないのでは」

そう答え，ラインハルトに座るように勧めた．ラインハルトはこの言葉を好意的なものとして受け取るべきかどうか判断に迷った．

「若輩の身ながらも，閣下の旗下の艦隊に配属になりました，ラインハルト・フォン・ミュゼル少将であります．」

「うむ．卿の才覚は注目に値するものがある．さしあたり，次の戦いの時には卿には思いっきり働いてもらう所存である」

「はっ，光栄であります．閣下のお役に立てるよう微力を尽くします」

「うむ．ところで，卿の分艦隊には7人の准将が配属されたようだな．うち4人は今回昇進したものであり，卿には少々もの足りないかもしれない」

「さて，ミュゼル少将，旗下の分艦隊にはヨードル准将の機動部隊が配属してある．さすがに4人も新任の司令官を指揮するのでは大変だろう．ヨードルは我が艦隊の中でも優秀な機動部隊指揮官である．卿の手腕に期待する」

「はっ，閣下の期待に添うべく切磋琢磨いたします．」

ラインハルトはグーデリアン中将のオフィスを後にし，キルヒアイスとともに宿舎へ帰っていった．

「なあ，キルヒアイス，ヨードル准将を知っているか？」

キルヒアイスは記憶の中から，その名前を搜した．

「そうですね，先日軽機動部隊から機動部隊の司令官になった人物ですね．艦隊運用に関しては非常に長けた司令官と聞いております．」

「ほお．．」

「また，攻勢と守勢のバランスのとれた司令官と聞いておりますが，年齢はラインハルト様の倍くらいだと思いますよ」

キルヒアイスは笑いながら，話をグーデリアン中将の方へ持っていった．

「そうだな，グーデリアン中将は公平な味方をしてくれそうだな」

ラインハルトとキルヒアイスはグーデリアン中将の人物像について語り，自分たちの今後の戦いについてどのような影響が有るかなどを話し合った．

数日後，ミュラーは戦術会議に出席をしていた．この戦術会議は分艦隊レベルのシュミュレーションを行うものであり，ある意味会議というよりゲームの感覚に近いものがあつた．

ミュラーはある分艦隊を指揮し，味方との連携により敵軍を追いつめていったが，味方の艦隊が翻弄されたため，敵中に孤立してしまっていた．

「いまここで，突破をおこなうのは．．まずいな．あまりにも前面が厚すぎる．」

ミュラーはいくつかのパネルを操作し，味方との連絡を図った．しかし，味方との連絡は敵の妨害の為にとれず，救援を頼むのは無理があることを知った．

包囲網の突破の基本は敵の陣の薄い部分をつくことである．しかし，むやみやたらに薄いところをつくと，その部分に罠が控えている可能性もある．ミュラーは索敵の為に，駆逐艦をいくつか出し，その報告を待った．

「よし．．この陣の向こうには敵は無しか．大きく迂回することになるが，やられるよりましだろう．．」

ミュラーはそう考えると，自分の分艦隊をいくつかのグループに分け，敵陣突破の部隊と後衛部隊を作った．まず，敵陣突破の部隊を戦艦でまとめ，後衛部隊を巡航艦でまとめた．さらに，駆逐艦のグループをつくり，独立運用の権限を与えた．ミュラーの作戦の基本は敵と交戦をする瞬間に駆逐艦艦隊を別な方向から敵陣に突入させ，その混乱に乗じて敵を突破するというものであった．

作戦を素早くまとめると、その作戦をコンピュータに入力し、すぐに作戦の実行を命令した。戦艦群を全面に押し出すことで、敵は自軍の突破の可能性が高いことを知った。そして敵軍が戦艦群を阻止すべく動き始めたとき、素早く駆逐艦群を他の方向から突入させた。

敵軍は一瞬ではあるもののどちらの方向に対して対応すべきか迷った。この一瞬をミュラーは待っていた。ここでミュラーは戦艦と巡洋艦の主力部隊を敵軍にぶつけることで、敵軍に突破口を作り、素早く巡航艦をその突破口に押し出すことで敵軍からの離脱を図った。

駆逐艦群はその足が速いために混乱している敵軍を後目に、他の方向から離脱した。敵軍はすぐに自軍を追いかけるべく体制を整えた。ミュラーは敵軍の素早い動きに対して矢継ぎ早に命令を行い、戦艦と巡航艦の壁をつくり対応をした。しばらくすると味方の艦隊が来援に来て、ミュラーはほっとした。

シュミレーションの結果は双方の損害状況などをみて、引き分けに終わったものの、包囲されている中から見事な戦術を見せ、攻勢と守勢の妙技を見せたミュラーに対して、参加者は賞賛の言葉をかけた。

「貴官の戦術は実に見事なものです。」

赤い髪をした少佐に声をかけられたミュラーは照れくさそうにした。

「いえ、貴官があの際に来援に来てくれなければ、再び包囲され、殲滅されていたでしょう。なぜ私があそこで突破すると思いましたか？」

「いえ、貴官があの際で戦力があるのに降伏をするとは思えませんでしたし、あの際では2つの道しかないと思った迄です。つまり、包囲されたままか、突破をするかです。そこで、もし突破を図るなら敵軍の薄い部分からだと思い、情報を収集してあの際に直行した次第です」

ミュラーはこの赤い髪の佐官の言葉に驚いた。ミュラーの作戦がその場で看破されていたのである。

「いえ、貴官が敵軍に居なくてよかった」

ミュラーは心底そう思った。

「私も貴官が敵軍でなくて良かったと思います。まさか敵を混乱させるために、駆逐艦部隊を用いるとは思いませんでした。お見事な戦術でした」

「いえ、あの際ではそれしか考えつかなかったのです。ところで、貴官の名前は..」

「申し遅れました、私はジークフリード・キルヒアイス少佐です。以後お見知りおきを」

「私はナイトハルト・ミュラー中佐です、こちらこそ」

彼らは握手をして、戦術会議の場を別れた。

” イゼルローンへの行軍 ”

「しかし、やつらも良く飽きないものだ・・・」

ミュラーは同僚の言葉に頷いた。

「これで6度目だぜ... 6度目、イゼルローン要塞が陥落するわけがないのに・・・」

「叛乱軍も必死なんでしょう」

「でもな、ミュラー中佐、必死でやってもイゼルローンは落ちないさ。こっちだって必死だからね。もし、イゼルローンが落ちて見ろよ... どうなると思う？」

ミュラーたちは同僚のその言葉に考え込んだが、イゼルローンが陥落するとは考えられなかった。

同盟軍は6回目のイゼルローン要塞の攻略戦を展開していた。現在はまだ征旅の途中ではあったが、すでにイゼルローン攻略に対しての情報は帝国軍に漏れていた。

帝国軍ではミュッケンベルガー元帥を中心に数多くの艦隊が参加していた。ミュラーはゲーデリアン艦隊ミューゼル分艦隊ヨードル機動部隊にあり、そこで艦隊運用士官として任に当たっていた。

現在艦隊はまだイゼルローンまで行軍の途中であり、今度の戦いがどのような形になるのか皆胸中是不安だらけであった。

ゲーデリアン中将与ヨードル准将は歴戦の指揮官である。この艦隊に属しているものは皆知っていた。しかし、ミューゼル少将に関しては全くと言っていいほど白紙に近かった。噂では多くの武勲を立てていると言うことであるが、20歳にもならない少年のような指揮官に信頼を寄せろというのは兵士や士官達には無理な話であった。ましてや、あの皇帝の寵姫の弟である。これでは信頼どころか不安感が増すばかりであった。そしてそんな中で同盟軍によるイゼルローン攻略がもたらされたのである。

イゼルローン要塞は難攻不落である。そう聞かされているミュラー達がイゼルローンが落ちると言うことは想像ができなかった。

「第一... どうやって落とすんだ？こちらにはトールハンマーがあるんだぞ。それに今回はこちらも大艦隊を派遣しているし..」

皆はうなずき艦隊戦でどのように戦うべきかについて思いを寄せた。

「ミューゼル少将は... どんな戦い方をされるのだろうか..」

ふと、ミュラーはこぼすと、同僚達はうーんといって難しい顔をした。

「結構武勲は立てていると聞いたぞ」

「でも武勲と艦隊を指揮することは違うことだぞ。パウル」

「そうだな... でも、ヨードル准将がいるから大丈夫だろう？」

「ヨードル閣下だってミューゼル少将の指揮で戦うんだぜ？」

皆はそれぞれに不安をいだいてはいたが、ミュラーはそんなに大きな不安は無かった。ミュラーは皆の話を聞きながらもゲーデリアン中將の部屋で会ったミューゼル少將の姿を思い出していた。彼は何かを秘めている、そんな印象をミュラーは持っていた。

「ミュラー中佐、いやに落ち着いているな？」

「ん... ああ。でも、ここはミューゼル少將を信頼するしかないんだろう？ ならば我々の仕事は如何に効率よく命令を伝え、艦隊を運用するかならうな」

「そりゃ分かっているけどな。果たしてミューゼル閣下はちゃんと戦術を理解できているかってことさ。個人的な武勲と艦隊戦術は大きな違いだからな」

「まあ、そうは言っても我々にはどうしようもないさ、そうだろう？」

チャデアンは仕方ないさって顔をして、時計をのぞき込んだ。

「おっといけない... 交代の時間だぜ、ミュラー中佐行くぞ」

ミュラーはチャデアンと共に艦橋へ登っていった。この艦は旗艦でありかなり大きな艦であったので、艦橋へ行くのも時間がかかった。

ミュラーは艦隊運用の中佐として戦艦群の艦隊運用に責任を持っていた。つまり、主任艦隊運用士官であった。

機動部隊には戦艦200隻と巡航艦300隻が配備されており、6名の中佐または少佐でこれらの機動部隊の運用の責を負っていた。6名の佐官は交代で任に当たっており、2名ずつでその任に当たっていた。2名の佐官

の下にはそれぞれ10名程の尉官が配置されており、佐官の命令によって尉官が具体的にそれぞれの艦に運用命令を送っているのである。

実戦中はかなり混乱が生じるため、3名の佐官が交代で、また15名の尉官が交代で任に当たることになっている。しかし、実際には殆ど交代の無い場合もあり、戦場での出来事はシュミレーションとは違うという一面がそれだけでも良く現れていた。

現在ヨードル機動部隊はイゼルローンへの航行中であり、航海主任参謀により行き先が指定されている。艦隊運用としては各艦が遅れていないか、もし遅れた場合どの様にするのか等を決めている。戦闘中とはまた違う意味で忙しい部署であった。

「現在の様子はどうか？」

ミュラーは艦橋に上がり、今まで運用にあたっていたクロップ少佐に声をかけた。

「はっ。現在1隻の戦艦が機関の故障で若干遅れ気味ですが、これもあと数時間で修理できるとの報告があります。あとは特に問題ありません」

「なるほど。どの艦か？」

「はっ、詳細はレエル中尉が把握しております」

「よし。あとはレエル中尉に聞くか..では、交代を申告する」

「はっ、艦隊運用の指揮を交代いたします」

クロップ少佐はこうして艦橋を離れていった。ミュラーはレエル中尉を呼び出し、遅れている艦の詳細を聞いたが、特に問題は無いことを確認した。念のために1時間後にその艦と連絡をとり、状況を把握することを決め、現在のヨードル機動部隊の部隊配置やシュミュレーションによる数時間毎の配置図を確認して一息をついた。

まだイゼルローンには長い道のりが必要であった。

” 第 6 次イゼルローン攻略戦 ”

グーデリアン艦隊はイゼルローンに到着した。同盟軍はまだイゼルローン回廊内には到達してはいなかったが、近くの星域に大部隊を移動させている旨の情報は入っていた。これらの情報も入ったことで、イゼルローンの中はこれからの戦闘に備えてごった返していた。ミュラーもそのような中、艦隊運用に万全を期すべく、通信、指令系統の確認に追われていた。

帝国歴 485 年 10 月 15 日 ミューゼルフ分艦隊ヨードル機動部隊に出撃命令が下った。

この前日、同盟軍はイゼルローン回廊に到達し、帝国軍は今後の戦闘を有利にすべく各艦隊の出撃命令が下された。無論、ミューゼルフ分艦隊にも出撃命令が下された。出撃命令と言っても、各艦隊毎に出撃許可が要請され、帝国軍首脳部はそれらに対して許可をただけである。

実際、今回の迎撃を指揮するミュッケンベルガー元帥にしても、戦略レベルにおいて各艦隊を統率する時期ではないと判断しており、同盟軍をイゼルローン回廊内に引き吊り込む為に有利に働くならばと考えているレベルであった。それ故に、各艦隊においても勝手気ままな運用が許される余地が残されたと言える。

このようなことから、ミューゼル少将はグーデリアン中將に出撃許可を求めたのである。実際グーデリアン中將も現段階では出撃許可を却下する理由も持ち合わせておらず、また、ミューゼルフ分艦隊の能力そのものを客観的に評価することを考えていた。

「キルヒアイス、グーデリアン將軍はなかなか食えない人だぞ」

ラインハルトは笑いながらもキルヒアイスにそう言った。実際、ラインハルトはグーデリアンの思惑を読みとっており、また、この時期に自分の能力を十二分に発揮することが必要だとも思っていた。

「ラインハルト様、これから各機動部隊の指揮官とお会いになりますか？」

「そうだな、実際に反乱軍が回廊内に入ってくるまでは時間がかかるだろうし、数回の出撃はあるだろう。補給と運用に関しても必要だと思うから、各機動部隊の指揮官と補給、運用の担当者も一緒に来るように伝えてくれ」
「わかりました。」

キルヒアイスはそれらの連絡事項を各機動部隊に伝えるべく通信士官のもとに赴いた。そして、会議に必要な場所と資料を整え、あとは数時間を待つばかりとなった。

「ミュラー中佐とヘルマン中佐を私のオフィスまで来るように伝えてくれ」

ヨードル准将は副官に伝えた。

しばらく後、ミュラーはヨードル准将のオフィスに赴いた。

「ミュラー中佐入ります。」

「ん、入れ」

ミュラーが入るとすでに先客がいた。ヘルマン中佐である。彼はヨードル機動部隊の補給を担当している士官であった。

ミュラーはヨードル准将に敬礼をし、ヨードルは返礼をした。

「さて、ミュラー中佐、ヘルマン中佐、ミューゼル少将からの命令で、我が機動部隊は出撃をすることになった。無論、ミューゼルフ分艦隊全体が出撃をする。そこで、これから 2 時間後に分艦隊の旗艦において、今後の方針と補給、運用に関する会議が開かれる。貴官らにはその会議に私と一緒に出席をして欲しい。必要な資料をまとめ、1 時間後に連絡艇に乗り込み、移動しながら打ち合わせをする。何か質問は？」

ヨードルはそこまで言う二人を見た。ヘルマン中佐がすかさず口を開いた。

「1 つ質問があります。出撃ですが、何日間、何回程なされるか閣下にはおわかりになりますか？」

「うむ、詳細については私にもわからん。これは分艦隊旗艦においてミューゼル少将から聞いた方がいいかもしれない。だが、私の考えでは 1 回の出撃に約 1 日から 2 日程、これが十数回程繰り返されるかもしれない。理由は、反乱軍は未だイゼルローン回廊内に到達はしていない。そこで、イゼルローンに引き吊り込むために戦術的に攻勢をかけ、敵を誘うのが一番であろう。今までの経験でもそのような例は多数ある。そこで、7 回や 8 回ではなく、十数回程は出撃がなされるだろうと考えている。」

「となりますと、艦隊運用も楽では有りませんか、閣下」

ミュラーは笑いながらヨードルに問いかけた。

「そうだな、出撃しつつ艦隊編成を行い、攻撃における運用、そして帰投時の艦隊編成、補給と時間に追われる

ことになるな。そのための準備が必要である。貴官らにはその辺の計画に関する資料をまとめておいて欲しい。」

ヨードルもまたこれからの出撃に関して苦労するなという印象を持っていた。それはほぼミュラーやヘルマンの胸中と同じものであったが、ミュラーはミュゼル少将の若さから何かするだろうなという想いが他にあった。

「というわけで、我が分艦隊は2日間程の出撃を連日行い、敵を回廊内に引き吊り込む作戦を行う。無論、各出撃毎に敵の戦力を奪うことも重用である。」

ラインハルトは各機動部隊の指揮官、運用、補給の士官を見回した。

「出撃回数は十数回に及ぶ可能性がある。そのための運用、補給について先ほどの指示通り用意しておくこととする。」

ラインハルト旗下には7人の機動部隊指揮官が配置されているが、うち4人が新任の准将であった。ラインハルトの推測通り、各機動部隊の指揮官はラインハルトの作戦案に戸惑っていた。確かに、イゼルローン回廊内に敵を引き吊り込むことは必要である。しかし、何もこちらから攻勢をかけなくても、敵は勝手にやってくるのではないかと、そういう想いが各機動部隊の指揮官の胸中にはあった。

ラインハルトが示した作戦案は分艦隊が攻勢に出て、敵の出方を見るだけではなく、敵の戦力を削減することである。敵の戦力を削ぐことは必要ではあるが、ただかた分艦隊、それも3000隻程度の戦力で何ができるのかという想いが各機動部隊指揮官の想いであった。

また、十数回におよぶ出撃というのも、彼らの予想の範囲を超えていた。今までに連日出撃をするという経験が無いためである。よって、その運用と補給についてはどのようにすれば良いのか戸惑うばかりでもあった。

ラインハルトはその思惑をほぼ読みとっていた。しかし、ヨードル准将とその運用士官はそのような顔を見せず、しかもヨードル旗下の補給担当者は独自補給案まで策定していた。これはすでにヨードル准将がラインハルトの思惑を読みとっており、運用、補給の士官に伝え、すでにその打ち合わせを済ませているということである。

これにはラインハルトも驚きを覚えた。

「さすがだな、ヨードル准将は。そう思わないか？キルヒアイス」

「そうですね、しかし、ヨードル閣下だけでなく、その旗下の各士官も優秀ですよ」

「ほう、なぜそう断言できる？」

「ミュラー中佐とは戦術会議で一緒でした。彼は包囲されている中から味方を損害を最小に抑えつつ撤退させました。」

「その包囲していた軍はキルヒアイスが指揮していたということか？」

「違います、包囲網は優れたものでした」

「なるほどな。キルヒアイスが言うなら優秀だな。宿将の下に優秀な人材か。今回の戦いはヨードル准将が重要な鍵を握っていそうだな」

「ミュラー中佐、ヘルマン中佐、ご苦労であった」

ヨードルは帰りの連絡艇の中で、二人の士官を労った。

「閣下、他の機動部隊指揮官は分艦隊司令のお考えに戸惑っていたようですね」

「ミュラー中佐、貴官もそう見えたか？私も彼らの補給担当者の狼狽が手に取るようにわかったよ」

ヘルマンは笑いながら話した。

「そうだな、貴官らの言うとおりだな。他の機動部隊指揮官はだいぶ戸惑っていたようだ。無理もないだろう。何せ、今回7人の機動部隊指揮官のうち、4人までが新任の指揮官なのだ。我々が分艦隊の鍵を握ると言っても過言では無いかもしれない。今日の様子をみていると」

ヨードルは考え深げに二人に話した。

ミュラーはラインハルトの側にいた赤毛の少佐を思いだしていた。

「あの少佐が居るのか。これはミュゼル少将の作戦指揮に期待できそうだな。」

ミュラーはこれからの戦いがどのようになっていくのか不安よりも楽しみが先にたっていた。

” 第 6 次イゼルローン攻略戦 II ”

11月6日ミューゼル分艦隊はイゼルローン回廊の中でほぼ同数の同盟軍と相対していた。

「敵は2500隻か。さて、どのようにするかな」

ラインハルトは不適な笑いを浮かべた。

「閣下、分艦隊司令官閣下らの命令文です」

ヨードルは副官から命令文を受け取った。その文面には艦隊を紡錘陣形にし、中央突破を行う旨が記されていた。

「この状況下で中央突破ですか。この命令は…」

副官はヨードルから渡された文面に目を通し、唸った。

「いや、以外といけるかもしれん。現在、敵は球形陣形である。普通は包囲網を考えるが、中央突破をすれば敵の動揺を誘うことができるかもしれん。そうなれば、あとは背面包囲で片づけられるかもしれんな。」

「なるほど。そうも考えられますな。うまくいきますかな？」

「可能性は大きいと思うぞ。なにせ、敵もまさか中央突破ということは考えてないだろうからな。ミュラー中佐を呼んでくれ」

副官は艦隊運用士官であるミュラーをヨードルの元へ連れてきた。

「ミュラー中佐、早速だが我が分艦隊は中央突破を行う。そこで、我が機動部隊はその先陣を務めることになった。しかし、ここで紡錘陣形を悠長に整えていたら敵に中央突破を見透かされる。今から艦隊を中央突破のために前進させるが、貴官には移動しながらの陣形再編成を命ずる。」

「はっ、了解いたしました」

ミュラーは敬礼をしつつ、移動しながらの紡錘陣形編成について頭を回していた。艦隊を移動させつつ紡錘陣形を整える、機動部隊単位でも困難な仕事である。まずは、分艦隊の紡錘陣形について各機動部隊の位置を確認し、その機動部隊毎に対する紡錘陣形の配置図を策定しなければならない。

ミュラーはクロップ少佐とレエル中尉に命令を発しながら、自分は各機動部隊の運用士官に対して配置に関する情報のやり取りを行っていた。

「よし、各機動部隊に対する配置に関しては分艦隊運用士官からの許可がおりたぞ。我が機動部隊の詳細配置はどうだ？」

「はっ、今策定中です」

「どれ、さて、この戦艦と巡航艦の配置には問題がある。まずは、中央には巡航艦を配置し、回りに戦艦を配置せよ。そうでなくては、側面が弱くなり、分断されるおそれがある」

「はっ、わかりました。今シミュレーションします」

レエル中尉とクロップ少佐は忙しそうにキーボードを動かしていた。ミュラーはその側で自らもキーをたたき、二人の配置図を確認し、修正し、移動に関するシミュレーションを繰り返していた。

「よし、この配置でいくぞ。各艦に対して編成データを送付せよ」

「はっ。各艦に対して編成データを送付します」

機動部隊の編成データは各艦に送付され、各艦の艦長はそのデータを戦術コンピュータにリンクし、それに基づいて自艦を操作する。この編成データは良くできており、各艦はスムーズに移動しながらの編成を進めつつあった。

「キルヒアイス、見事なものだな、ヨードル准将は」

「そうですね。前進攻勢しながらの困難な部隊編成が実にスムーズです」

ラインハルトはスクリーンに映し出される分艦隊の編成表示を見ながら敵の最も弱い部分を見極め、そこに突撃するように命じた。

「閣下、敵に中央突破されます！」

同盟軍のワイドボーン大佐は分艦隊指揮官のワーツ少将に叫んでいた。ワーツ少将は球形陣形を布陣し、そこから敵の出方を見つつ柔軟に対応する予定であった。しかし、常識外の中央突破戦法を帝国軍がとり、さらに驚異的な速度で同盟軍ワーツ分艦隊は分断されつつあった。

「ワイドボーン大佐、貴官はこの状態からどうすれば良いとおもう？」

ワーツ少将は分艦隊参謀長のワーツ大佐に問いかけた。ワイドボーンは同盟軍の中でも秀才と言われる程の頭脳の持ち主である。しかし、正攻法にこだわりすぎる面があった。この時も、帝国軍の中央突破戦法に対して真っ向から対抗する様な考えを示した。しかしながら、帝国軍の突撃の速度に対応できず、艦隊の再編成をする間も無いままに艦隊が蹂躪されつつあるところであった。

「直撃します！」

分艦隊旗艦に対し、帝国軍艦艇からの主砲が着弾しつつあった。

「敵分艦隊旗艦撃沈」

ミュラーはその情報を自席で聞いていた。ヨードルはその報告に頷くと、すぐに情報を分艦隊旗艦に送付する旨を発した。

「よし、この戦い勝てるぞ」

ヨードルもミュラーもお互い同じ事を思っていた。

「敵の組織的な攻撃は終わりました。」

ラインハルトは自席でヨードルからの報告を受けた。

「よし、これから掃討戦にうつる。各機動部隊は各個に掃討作戦を展開せよ。」

「はっ」

スクリーンの向こう側でヨードルは敬礼をし、その姿は消えた。

「どうだ、キルヒアイス。ヨードルはやるじゃないか。」

「そうですね。今日の艦隊運用はすばらしいものがありましたね。」

「今日帰投したらヨードルと艦隊運用士官と会おう。そう言えば、運用士官はキルヒアイスとは既知であったな。」

「ナイトハルト・ミュラー中佐です。」

「そうだな、夕食でも一緒にしよう。キルヒアイスご苦労だが手配しておいてくれないか？」

「わかりました」

こうしてミュラーはラインハルトと直接話す機会を得たのである。

結局、この戦いで同盟軍ワーツ分艦隊は2500隻のうち、帰投した艦艇が300隻未満と徹底的に掃滅され、かつ、10年来の秀才といわれるワイドボーン大佐が戦死したのであった。同盟軍にとって痛い一戦であった。

” 第 6 次イゼルローン攻略戦 III ”

1 1 月 9 日の戦いは分艦隊を V 字型陣形の二段構えに編成し、同盟軍ウィッシュボーン分艦隊を包囲した。同盟軍ウィッシュボーン少将は苦心の未包囲網を突破したものの、旗下 3 0 0 0 隻のうち、1 2 0 0 隻を失った。

1 1 月 1 4 日の戦いは同盟軍キャボット少将の高速機動集団の側背を攻撃し、壊滅状態にさせた。

1 1 月 1 7 日

「敵前衛部隊食らいつきました」

ミュラーはスクリーンを見ながら、自機動部隊の動きを追っていた。

「よし、部隊をもう少しさがらせよ」

ヨードル准将の命令をミュラーはすぐに各艦艇の行動情報に置き換えた。戦術コンピュータにリンクされた情報を基に各艦艇は動く。すなわち、旗艦からの情報を基に動くことによって、機動部隊としての組織的な行動が可能となるのである。

「敵、前衛さらに接近、また、本隊も移動しつつあります」

「部隊をさらに後退させよ」

ミュラーは目標の数値を素早く計算し、その数値から各艦艇の動きを推定した。各艦艇毎の計算は非常に複雑な偏微分方程式になる。無論、この偏微分方程式を人間が解くことはない。しかし、どのような条件を用いれば解けるかということは、知識や経験無くしてはできない。

運用士官の優劣はこのような数学的な才能の有無でも分かれる。そして、優秀な艦隊指揮官というのは、数学的なセンスが必要であり、無論、ミュラーの上司であるヨードル准将は、十二分にそれを備えていた。

「敵、目標地点に到達しました」

艦隊通信士官の報告を聞いたラインハルトは攻撃を命じた。

「ヨードル准将は見事な艦隊運用を示したな。見る、敵は重深陣の中に誘い込まれたぞ」

ラインハルトは側にいたキルヒアイスに笑いながら問いかけた。

「そうですね。やはりヨードル准将は優れた才能の持ち主ですね。また、艦隊運用のミュラー中佐も同じでしょう。」

「そうだな、先日会った時にそう感じたな。将来、ヨードルとミュラーを旗下に加えたいものだな。」

キルヒアイスはうなずきつつ、あることを思い出していた。

夕食のとき、キルヒアイスはミュラーの名前に聞き覚えがあることを思い出していた。ラインハルトが中佐の時、ある作戦を実行するために同盟領へ赴いたとき、ミュラーが駐在武官でサポートしてくれていたことを思い出していたのである。

「貴官は 2 年ほど前、フェザーンで駐在武官をしておられませんでしたか？」

この問いはキルヒアイスとミュラーの二人きりになったときに問いかけたものである。ミュラーはちょっと驚いた顔をし、そして頷いただけであった。

「なるほど、思慮深い人らしい」

何も言わず頷いたということは、ラインハルト達の作戦について知っているということであり、それが口外できない性格のものであることを知っているということであった。例え、当事者間であっても、口に出してしまえばそれは機密でなくなる。キルヒアイスはその時のことを思い出していた。

「ミュラー中佐ならたぶん大丈夫でしょう」

そうラインハルトに答えたキルヒアイスである。ラインハルトはおやっという顔をしたが、キルヒアイスの目をみて頷いただけであった。ラインハルトもこの時にはミュラーの名前を思い出していたのである。

「敵、前衛部隊殲滅しました」

「敵、本隊後退しつつあります」

ヨードルはその報告を聞きながら、艦隊をどう動かすべきか考えていた。ふと、ミュラーに顔を向けたとき、ミュラーが何もしないで黙って座っていることに気がついた。

「なるほど、ミュラーの考えは黙って敵を撤退させることか。」

そう読んだヨードルはさて、自分ならどうするかと考え始めたが、すぐにそれは中断させられた。

「分艦隊司令官より命令です．敵前衛部隊を掃討しつつ，帰投せよ」

同盟軍はこの日ジャケット機動艦隊旗下2700隻のうち，前衛部隊の800隻を失った．一連の戦闘は同盟軍にとって面白いはずがなく，これらの戦闘は帝国軍にこざかしい指揮官がいるのではないかという想いを抱かせた．

11月19日

同盟軍は8000隻の艦艇を用いた作戦を実行した．前衛部隊としてウィッシュボーン艦隊およびジャケット艦隊の計3700隻を配置した．両艦隊の指揮官は先日したたかにこざかしい敵にやられた指揮官であり，今回敵を殲滅する機会が到来したことに高揚感があった．

7時45分，ラインハルトの分艦隊は同盟軍の一角を攻撃した．攻撃した敵を後退しつつ引き吊りだし，その前衛部隊をさらに攻撃した．その攻撃の戦闘にいるのはヨードル准将の機動部隊である．十分に敵を誘い出したところで，敵の側面を逆進し背面展開をする，これがラインハルトから示された今日の作戦案であった．

ミュラーはここ十数回の戦闘で，ラインハルトが種々の戦術を試すことが目的であることを確信した．もちろんその話はヨードルにも伝えてあり，ヨードル共々苦笑したものであった．だが，お互い種々の戦術を試すことは嫌いではない．それどころか，ヨードルはその場における状況からの確かな戦術案を示すラインハルトに感銘していたほどである．

「見たか，中佐．この状況であのポイントに攻撃指示をだすのだぞ．あのポイントは敵の艦列のウィークポイントだ．よくこの状況で判断できるものだ…」

ヨードルは毎回戦闘が終わった後に戦術会議を催し，旗下の機動部隊の幕僚，士官を呼んで連日討議していた．今日は今までに試していない側面逆進，背面展開の戦術案をラインハルトより示されていた．連日の戦闘とその後の会議において運用に多少の自信をもったミュラーではあるが，いざ戦闘になると今までの知識と経験をフル動員して対処していた．

「敵背面に出ます」

「よし，作戦計画通りに展開せよ」

ミュラーは指示を受けて，すぐに各艦艇に対する配置計算を始め，出来次第，各艦艇にデータを送付していった．

「閣下，まもなく背面展開をし終わります」

ヨードル准将は参謀から報告を受けた．ヨードルが頷き，分艦隊旗艦へそう報告するよう命令するその時，通信士官から叫び声が上がった．

「敵，天頂，天底，後方より攻撃！」

「敵総数4000隻！」

「前方の敵，転回します！」

ヨードルはこの時，敵の包囲網の中に分艦隊がいる事に気がついた．つまり，敵にまんまと乗せられたのである．

「ふむ．要するに八方塞がりか…」

そうつぶやいたヨードルはどうするかを思案した．まず，敵の包囲網の弱い点を探す．すぐに副官に伝え，情報士官が索敵を始めた．

次に，そこから艦隊を逃がす必要があるが，殿（しんがり）をどうするかであった．

「我が機動部隊が殿かな．」

索敵情報をみつつそう思うヨードルであった．

「キルヒアイス，まんまとやられた…」

「そうですね，如何いたします」

「敵の包囲網の弱い部分は？」

「はっ，ヨードル准将より索敵結果が来ております」

「ほう，すばやいな．11時の方向か．しかし，これではヨードルの部隊が殿になるな．」

「それについてはヨードル准将より殿の任の上申が来ております」

「ヨードル准将につなげ」

ラインハルトはすぐにヨードル准将とスクリーンで話した。

「閣下、我が機動部隊が殿を務めます。その間に分艦隊を後退させますよう」

「卿はどうするのだ？」

「私はぎりぎりまで抵抗し、包囲網を突破します」

「うむ、卿とイゼルローン要塞で会えるのを楽しみにしている」

「はっ！」

ヨードル准将の敬礼した姿をみつつ、ラインハルトは通信を切った。

「よし、我が機動部隊は殿だ」

ヨードルは高揚した精神を抑えつつ、各所に指示をだしていた。

「まず、反転し、敵の後背に備えよ、天頂、天底の敵についても、同様である。後背には300隻、天頂、天底方面には各々100隻を振り分けよ」

ミュラーはヨードルの命令を実行すべく、頭と手をフル回転させている後背方面へは戦艦100隻、巡航艦200隻を振り分け、側面に戦艦を振り分けた。天頂、天底方面へは戦艦、巡航艦を各50隻、計100隻づつ振り分けた。

しかし、同盟軍の戦力は圧倒的であり、防御の弱い巡航艦は1隻、また1隻と撃破されていった。その空いた穴をうめるべく、ミュラーは後方の艦を前衛に配置すべく計算を繰り返していた。だが、ヨードル機動部隊はその数を徐々に減らしていった。

「まだ、分艦隊本隊は逃げきれんのか？」

ヨードルは参謀に確認をしたが、参謀の答えははっきりしなかった。情報が入り乱れ、正確なことがわからないのであった。

「敵、側面からきます！」

「本隊との距離が開きました」

「よし、部隊全体を後退させろ、たぶん、分艦隊本隊は包囲網を突破しつつあるだろう」

ヨードルは少ない情報からそう判断をした。

「敵前面から突撃してきます！」

「主砲連射！」

旗艦ヘツァーの艦長はそう命令していた。

「敵、側面からきます！直撃来ます！避けきれません！」

旗艦の中は騒然とした。

「何でもいから何かにつかまれ！」

ヨードルはそう叫び、自席につかまった。ミュラーは頭を抱え、体を固定するように部下に指示をすると自分もそれに従った。旗艦ヘツァーを一発の直撃弾が襲った。その直撃弾は艦橋には直撃はしなかったが、艦橋に近いところに当たり、艦橋内部では破壊と火災が発生していた。

ミュラーが頭を持ち上げたとき、旗艦の中が破壊と火災に包まれていることに気がついた。横をみるとクロップ少佐が血を流して倒れていた。

レエル中尉は頭を抱えていたものの、軽傷であり震えていた。チャデアン中佐は左腕を押さえて唸っていた。

「大丈夫か..チャデアン..」

「卿こそ大丈夫か？頭がひどい出血だぞ..」

ミュラーはふと手を頭にやり、その手を眺めてみた。確かにひどい出血であったが、頭は痛くない。不思議に思っふと上をみると、指揮エリアの端に誰かが倒れており、その人物からおびたらしい血が流れてミュラーの頭上にかかっていることがわかった。チャデアンもそれがわかったらしく、頷いた。

「どうやらミュラー中佐は不死身らしいな..」

「墓碑銘には合わないな。ヨードル閣下を見てくる。卿はすぐに医療班の世話になるといい」

ミュラーは立ち上がったが、その時にはじめて足に負傷していることがわかった。それでも動けないわけではないので、そのままヨードル准将の指揮座に向かった。

「あっ....」

ヨードル准将の指揮座を一目見たミュラーは唸った。准将は指揮座におらず、指揮エリアの端にいた。正確には准将の体は左端へ、頭は右端に合ったのである。その体から流れるおびただしい血はミュラー達の座る運用指揮に流れ落ちていた。その他の参謀、幕僚達もほぼ同じ状態であった。理由は指揮エリアの上部スクリーン全体が落ちてきたためであった。その衝撃で指揮エリアにいた高級士官は全滅してしまっていた。艦長も頭から血を流して倒れていた。

ミュラーはすぐに艦長席から医療班を呼んだ。そして、機動部隊の様子を確認始めた。まず、副機動艦隊指揮官であるレジエ大佐を呼んだ。しかし、その努力も虚しくすでにレジエ大佐は戦死をしていた。この時、ヨードル艦隊は壊滅状態に陥っていた。このままでは残った艦艇も掃討されてしまうおそれがあった。

「この艦橋で動けるものは？」

艦隊運用士官は5人、旗艦運用士官は6人であった。幸いにも旗艦の副長である少佐が軽傷であったので、旗艦の運用を少佐に任せた。

ミュラーは艦隊運用席に付き、無事な士官と共に各艦に命令を発し始めた。

「中佐、良いのですか？勝手に運用命令をだして」

「かまわん、このままでは機動部隊の残りも掃討されてしまう。私が責任をとるからまずは各艦の戦術コンピュータとの通信を確保し、それを確認せよ。その後、後退をするが、戦艦を全面に押し立て、巡航艦をその間に配置せよ。いいか、後退は徐々に行い、頃合いをみて、転回し全速で逃げるぞ。少佐、この艦は最期に逃げるようにしてくれ。」

「はっ、中佐殿」

副長である少佐はすぐに命令を実行すべく、艦を操作し始めた。ミュラーの部下達は残った艦艇82隻を確認し、その運用指揮を取り始めた。

「よし、2時のポイントに火炮を集中するように命令をつたえるんだ」

「現在位置から約200万キロ後退せよ」

ミュラーは徐々にではあるが、同盟軍の包囲網から抜けつつあった。

「よし、今だ！転回し、全速で包囲網を突破せよ！全艦ミサイルを全方位網に向けて撃て！」

ミュラーの命令の元に各艦艇は転回する際にミサイルを撃ち、全速で包囲網から突破した。

「レエル中尉、突破した艦はどのくらいだ？」

「はっ、78艦であります。」

「そうか、ところで、ミューゼル閣下は？」

「すでに包囲網を突破していますが、我が機動部隊と合流するために速度を落としております。」

「わかった。すぐに本隊と合流しよう。それが先決だ。それからあとは後のことだ。」

ミュラーはそう言い残すと、指揮エリアを見上げた。今だヨードル准将の体はエリアの縁に残ったままであった。

「兎に角、少将に報告をしなければな。しかし、勝手に指揮をとったからな。軍法会議ものかな」

「キルヒアイス、やられた。敵は我々の行動を見透かしていたようだ」

ラインハルト八結局旗下の艦隊3000隻のうちこの戦いで800隻を失った。特に損害がひどかったのがヨードル機動部隊であり、500隻のうち、400隻強が失われ、かつ、ヨードル准将まで戦死した。ラインハルトは焦燥感に襲われ、今後どのようにすべきか少し迷っていた。

「閣下、ヨードル機動部隊主任運用士官のミュラー中佐が面会を求めていますか？」

通信士官の報告にラインハルトは首を傾げた。

「ミュラーが？」

「ミュラー中佐は壊滅寸前の機動艦隊を指揮し、包囲網脱出を果たしました。その報告だと思いがすが。」

「よし、合おう、ただイゼルローンに帰投してからだ。それまでは気が抜けない。ミュラーにそのまま機動部隊を統率するように言ってくれ」

「わかりました」

キルヒアイスはその命令を通信士官へ伝えた。

” 第 6 次イゼルローン攻略戦 IV ”

先の戦闘では、ラインハルトは旗下の艦艇を約 8 0 0 隻失った。ヨードル准将旗下の機動部隊はその数を 5 分の 1 以下まで減らし、機動部隊としての編成はできなくなっていた。

ラインハルトは残ったヨードル旗下の機動部隊を直接指揮下に置き、その艦隊運用をミュラーに任せた。

帝国暦 4 8 5 年 1 2 月 1 0 日同盟軍の撤退によって第 6 次イゼルローン要塞攻防戦が終息した。ミュラーは 1 2 月 1 0 日における戦闘、つまり、同盟軍の後方に展開し同盟軍を罠にかける戦闘において、ラインハルト指揮下の艦隊運用士官として今までと同様に優れた実績を示した。

2 2 0 0 隻の艦隊が同盟軍 3 万隻の艦隊を引きつけたこの戦闘では、徐々に後退しながら同盟軍の前衛部隊を攻撃する手腕を如何なく発揮した。

「中佐、3 万隻の敵軍を引きつけるなんて経験ははじめてです」

レエル中尉はやや興奮しながらも、艦隊に対する指示は正確に行った。

「そうだな、私も初めてだ。ミューゼル閣下はただの人ではないということだな。見る、3 万隻が本気で追いかけてくるのだぞ」

「しかし、このままだと我々は孤立しませんか？それが…」

「いや、もうしばらくするとトールハンマーがでてくるだろう。その時にはすぐに艦隊を司令通りに動かさなければならない。その準備を怠るとさらにひどい目にあうぞ」

「…ですね。肝に銘じておきます」

ミュラーは自軍と同盟軍の動きを見逃さないように、常に戦術モニターを見続けていた。同盟軍の艦列は徐々にではあるが伸ばされ、無秩序な状態になりつつあった。対して、自軍は艦隊としてこじんまりしているものの、同盟軍の先頭集団を常にひっぱりつつ高速に後退している。

「もう少しだ.. もう少し…」

ミュラーは隣のモニターをみた。そこにはイゼルローン要塞が映し出されている。それは見る者にとってどのような印象を与えているのであろうか.. そんなことをふと思うミュラーであった。

「トールハンマー砲撃準備しています！」

「全軍天頂に張り付け！！！」

ラインハルトの命令が旗下全軍に響きわたったその瞬間、ミュラー以下の運用士官たちはリンクされた戦術コンピュータを操作し、全ての艦艇に急速上昇を命じていた。

2 回のトールハンマーの発射によって、同盟軍の本体は半個艦隊に匹敵する艦艇を失った。

1 2 月 1 0 日 1 7 時 4 0 分第 6 次イゼルローン要塞攻防戦は同盟軍の全面的退却をもって終息した。この戦いで同盟軍は 7 5 万 4 9 0 0 人の戦死者を出し、帝国軍は 3 6 万 8 8 0 0 名の戦死者を出した。そして、少なくともイゼルローン要塞に立てこもる帝国軍首脳部にとって、この戦いは終わりとなった。

「まだ反撃してくるかもしれん。殿の部隊に対しては警戒態勢をとり続けるよう通達しておいてくれ..」

ミュラーは指示を出すと、腕を伸ばした。

「ん.. 疲れた..」

「中佐殿、コーヒーでも如何ですか？」

レエル中尉は振り向くと、疲れた顔をミュラーに向けた。

「そうだな.. 少佐どうだ？」

戦艦ヘッツァーの艦長代理である少佐は「そうですね」と答え、従卒に艦橋要員全員分のコーヒーを持ってくるように命じた。

「しかし、この戦いは最悪だな…」

「どうしてですか？中佐」

「考えても見ろ。確かに帝国軍は勝ったし、ミューゼル閣下旗下の艦隊も手柄を立てた。だが、我が機動部隊は壊滅したんだぞ。ヨードル閣下も亡くなるし..」

「そうですね.. 私らみたいな新米でも公平に扱ってくれた司令でしたからね.. ヨードル閣下は..」

艦橋にいる人々はまだ壊れたままとなっている指揮座を振り向いた。数日前までは、そこにはヨードル准将が座わり、機動部隊に命令を発していたところであった。

「中佐、旗艦から通信が入っています。ミューゼル閣下からです」

「ミューゼル閣下からか？よし、通信をつなげ」

「ミュラー中佐。卿は今回の戦い良くやってくれた。その艦隊運用についても如何なく手腕を発揮してくれた。さて、中佐、この宙域の味方艦艇の収容と敵艦の掃討を卿に命ずる。危険な任務であるが、卿の手腕に期待する」

「はっ、拝命します」

「うむ。あとでイゼルローンで会おう」

スクリーンはすぐに消え、ミュラーは敬礼をしたまま立っていた。

「中尉、50隻ばかりでこの任務を行うので、選定してくれ」

「50隻ですか？中佐..78隻でしょう？」

ミュラーはああそうだなという顔をして、うなずいた。

「そうだな。78隻だ。宙域を割り振るからスクリーンを出してくれ。」

戦艦ヘツァーの中はまた活発に活動を始めた。今度はたぶんだれも死なないだろう。そう思うミュラーであった。

「というわけで、ミュラー中佐はその手腕を遺憾なく発揮してくれました。」

ラインハルトはゲーデリアン中將にミュラーの功績について説明をしていた。ゲーデリアンはその説明を資料を見ながら聞いていた。報告書はすでに見ていたが、報告書では言い表せない部分を直接ラインハルトから質問をしながら聞いていたのである。

「なるほどな。よく分かった。で、卿はこの報告書をどうしたいのだ？」

ゲーデリアンは報告書を指さしながらラインハルトに尋ねた。

「はっ、中將閣下からミュラー中佐に対する昇進推薦をしていただきたいと思います」

「ふむ。なるほどな。しかしだな、ミューゼル少將覚えておくといい。この戦争は長く続いている。そして優秀な士官は足りないときている。今回、卿は中將に昇進するだけの功績を挙げた。つまり、次は艦隊司令官というわけだ。」

「....」

「卿が艦隊司令官になったときに、優秀な士官は必要だろう。ちがうかね？」

「しかし、それでは閣下が..」

「私より卿の方が未来があると思うがね。さて、それはさておき、ここに昇進に関する推薦状がある。すでに私のサインは承認の欄にしてある。推薦者の欄に卿のサインが必要なようだな..」

「いいかね。優秀な士官を集めようと思うならば、自分自身で優秀な士官を推薦することだ。無論、ミュラー中佐だけではない、ここにある、ビットェンフェルト大佐の推薦状も同じ事だ。でないと、将来、人に優秀な士官を取られるぞ..」

「はっ....」

ラインハルトは推薦者の欄に署名を行った。ゲーデリアン中將はそれを見て、シュトラウス大尉を呼ぶとすぐに書類を渡した。

「自分の幕僚は自分で選ぶ。無論、軍務省の官僚どもはそんなことはかまいたらないだろう。しかし、自分が生き残るためには少しでも自分で選んだ士官を自分の旗下に置くようにしないといけない。その為にも、今から布石をしておくことだ」

ラインハルトはこの時直感ではあったが、ラインハルト自身の昇進推薦をゲーデリアン自身が行ったことを知った。

ゲーデリアンはため息をつき言葉を続けた。

「さて、私の艦隊司令官職はこれで終わりだろう。これからは軍務省の机の上が私の戦場になるな..」

ラインハルトは敬礼をし、ゲーデリアンの執務室を後にした。

首都オーディンでは戦いの度に人事が行われていた。ミュラーはこのとき中佐から大佐へ昇進を果たした。そして、その推薦人がミューゼル中將であることを知るとすぐに挨拶に向かった。

「中将閣下、この度は推薦の程誠に有り難う御座いました」

「ミュラー中佐、いや、大佐、卿は良くやってくれた。また、そればかりではなく、卿には才幹がある。昇進はその結果でしかない。次は將軍だな」

「いえ、小官ごときに将は合いません。しかし、これからも粉骨碎身やっていく所存です」

「うむ。ところで、卿はこれからどうするつもりだ。大佐となったからには戦艦の艦長たる資格もある。しかし、できれば作戦幕僚として卿には旗下で活躍して欲しいが」

ミュラーは少しこまった顔をした。ラインハルトはそれを見逃さなかった。

「なにか不都合でもあるのか？」

「はっ、実は今回昇進とともに辞令が出され、メルカッツ大将旗下の作戦幕僚を拝命致しました。小官としてもミュゼル閣下の旗下で働きたいのですが、こればかりは私の一存ではどうにもなりません。せっかく推薦していただきながら、この様な結果になって申し訳ありませんが。」

ラインハルトはこのときグーデリアンの言葉を思い出していた。なるほど、推薦する効果はこういうところに表れるのか...と

「いや、卿に責任はない。軍務省の官僚が書類だけで決済した結果だろう。」

「はっ..」

ミュラーはしばらく考え込み、決意を声にだした。

「閣下が御栄達の際には、ぜひ小官をその旗下にお加えください。」

ラインハルトは頷いた。

ミュラーがラインハルトの旗下で戦うのは、アスターテ会戦の時であり、それはメルカッツ大将旗下の作戦幕僚の時であった。ラインハルトの元帥府に列を並べるのは貴族連合軍との戦いのときであり、同時にミュラーが艦隊司令官として中将に昇進したときであった。

その後、ナイトハルト・ミュラーは鉄壁ミュラーと称され、良くラインハルトに仕えた。ローエングラム王朝において、ミュラー元帥の功績は長く伝えられ、今では伝説となっている。

< 終 >